

言の葉に月の光

森野 水琴

彼女は別荘でくつろいでいる。大学の夏休みに一家で避暑に来た別荘で時々週末を過ごすようになっていた。

別荘の近くで木洩れ日こもびの中、森林浴するのが楽しみである。風のささやきは時として新たな言の葉を運んでくれる。

彼女は教養あふれる女性に憧れている。別荘にも本を持参しているのは教養を高めるためである。内面から磨きたいという切なる願いである。

読書の合間に眺める夜空に月がささやく。

魅せよ そなたの魅力

自分の魅力を彼女は問いかけた。魅力というほどには教養を高めていない。しかし内面から磨きたいという願いは、自らを高みにいざなってくれそうである。

自宅に帰った彼女は父親に、大学の図書館で授業のあと二時間ほど勉強してきたいと申し出た。女子大学に通っているので父親は快く許可した。

翌日、彼女は大学の図書館で空席を探している。四人掛けのテーブルの中で一人本を読んでいるテーブルがあり、斜め向かいに彼女は着席した。

熱心に本を読む二人は時折り眼が合うと微笑みあった。彼女が大学の図書館を所望したのは、このためである。自宅の蔵書は膨大だが、学習している姿が見られるのは大学の図書館が一番である。

二時間との約束なので彼女は会釈して席を立った。新たな楽しみができた。

以来、その四人掛けのテーブル席は、ふたりの指定席になった。

彼女は大学一年生で、相席の女性は大学三年生である。

先輩の女性の所作は洗練されていて、彼女も感化されていく。

先輩は卒業前に見合いをし、卒業後に結婚することになった。

結婚相手は何と彼女の兄である。

彼女の母は微笑みながら、自分も大学の図書館の縁で嫁いだのだと説明した。

どうやら大学創設以来、あのテーブルは縁結びのテーブルなのらしい。

先輩は卒業に際して、図書館の席を引き継いでもらいたいと言った。彼女は快諾した。

先輩は卒業後、彼女の兄と結婚し、新妻として一家の一員となった。

夏になり、一家総出で別荘に避暑に来ている。

新妻と彼女は夜空を眺めている。  
月がささやく。

ますます魅力を発揮しなさい

彼女が先輩から図書館の席を引き継いで半年たった。

半年の間に何人か斜め向かいの席に座ったが定着しない。

ある日、一年生と思われる女性が斜め向かいに着席した。

二年前に先輩と相席した時のように、時折り眼が合うと微笑みあう二人。ようやく指定席のパートナーが見つかった、と彼女は微笑んでいる。